

---

— ◆ 2021年度共同研究グループ 経過報告 ◆ —

## 音声研究と音声教育

小松 雅彦 / 相原 昌彦

言語教育において音声教育の重要性が徐々に認識されてきている。本研究グループでは、幅広く音声とその教育についての研究を行っている。言語研究センター共同研究の期間は通常最長3年であるが、新型コロナウイルスの影響で研究の遅れがあったことが配慮されて4年目となる本年度まで延長することが認められた。

昨年度は、学生と共同で音の印象についての3つのトピックの研究に着手した。本年度は、そのうちの1つである動物の鳴き声と擬声語の関係について、卒業した学生から引き継いで研究を行っている。現在のところ、昨年度準備した14種の動物の鳴き声の音声素片について20名に対する聴き取り調査が終了し、今後分析を行う予定である。調査はアイアール・アルト社に依頼して行っ

た。本研究の成果が未公開であるため詳細の報告はここでは控える。

音の持つ印象についての研究は、マーケティングの領域では注目されているが、言語学・音声学の領域ではまだまだ数が少ない。特に、擬声語・擬音語は、人間による音の知覚・認知プロセスを反映しつつ、他の語彙層とは異なった擬声語・擬音語特有の音韻論的プロセスに組み込まれたものであり、知覚・認知と言語システムが交わる研究領域である。まだまだ未開拓の研究領域であると考えている。